

伊豆分場だより

第 3 8 4 号

目 次

巻頭言

今、この瞬間を記録に残す・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

調査研究から

2025 年度キンメダイ種苗生産研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

キンメダイ漁場の海底地形調査

～調査船駿河丸による伊豆東岸沖漁場調査～・・・・・・・・・・・・ 4

普及・地域の話

第 31 回静岡県青年・女性漁業者交流大会より

藻場の回復を目指して ～ 一本釣漁師の願い ～・・・・・・・・・・・・ 7

漁 海 況

白浜の定地水温・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16

令和 7 年 10～12 月の伊豆半島東岸定置網漁況・・・・・・・・・・・・ 17

分場日誌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

静岡県水産・海洋技術研究所伊豆分場

令和 8 年 1 月

巻頭言

今、この瞬間を記録に残す

10年ほど前、焼津の水技研に在籍し、「関東・東海海況速報（以下、速報図。URLは<https://fish-exp.pref.shizuoka.jp/01ocean/kouseido.html>）」の作図を担当していた。過去からの経緯や現在の作図方法等については省略するが、速報図は高知沖から茨城沖までの海況を黒潮流路と等温線で表したもので、静岡県を含む複数機関が協力し平日は毎日発行している。当時は、黒潮と等温線を全て手書きで作図しており、4週間に亘る発行当番が回ってくると、海の中の水温分布を様々なデータを見て判断し、頭の中で3Dにしてから等温線を一本ずつ引き平面に落とし込んでいた。今になって自分が作製した速報図を見ると修正したくなるものもあり申し訳なく思うが、この業務を通じて水産職として働く上で大事な感覚をつかんだと思っている。

それは「黒潮の流れを予測することはできるが、人間は流れそのものをコントロールすることはできない」というもので、文字にすると当たり前だが毎日連続して海の様子を図で表現しているうちに、黒潮は黒潮の流りたいように（流れざるを得ない方向に）流れていると体感したのだ。

その後、伊豆分場含め2つの職場を経験し、いずれも資源管理に関する業務の担当となった。黒潮と同様、海の生き物（海洋生物資源）に対しても、「今起きていることや過去に起きたことを調べたり未来を予測することはできるが、人間がその増減を意のままにコントロールすることはできない」と思っている。これは感覚というよりも自然界に対する畏敬の念に近いと思う。

令和6年4月に伊豆分場に赴任し、今回の黒潮大蛇行の終息前後をキンメダイ漁業の担当としてやってきた。昔から黒潮が蛇行すると漁が難しいと言われる伊豆東岸沖は、令和7年12月時点でも好漁とは言えず、期待しているほどではない。

そういった中、漁業者は今も自主的に定めた資源管理のルールを守り操業している。市場調査の帰り道や、漁業関係者（漁業者、仲買人、漁協職員）と漁模様について意見交換した後等、一体自分には何ができるのかを考えるうちに、「今この瞬間を記録に残しておくこと」が重要だと思うようになった。苦しい漁模様にもわずかな変化があるかもしれない。市場の測定結果や水揚の数字だけでなく、最前線にいる漁業者が感じ取る漁場や魚の変化を聞き、伊豆分場のデータと合わせれば、最初は小さな兆しでも後から振り返った時に何かの指標になるかもしれない。

人間はキンメダイ資源を意のままに増やすことはできないが、記録を残し関係者で共有・検証することで次のピンチに立ち向かうことができると思っている。そういった希望をもってこれからの漁模様の変化を見守りたい。（松浦玲子）

2025 年度キンメダイ種苗生産研究

伊豆分場ではキンメダイの資源回復に向けた種苗生産研究に取り組んでいます。今年実施した調査、試験の概要を紹介します。

キンメダイの卵、精子を確保するため、漁船を備船し親魚採捕調査を行いました。調査は8回実施し、新島沖、稲取沖の漁場で合計104尾のキンメダイを釣り上げました（表1）。釣り上げたキンメダイは船上で冷海水（12～14℃）の水槽に收容することで、ほぼ全数を生きたまま伊豆分場に持ち帰ることができました。また、親魚採捕調査とは別に、漁業者の漁に同行して卵を持ち帰りました。これは、釣り上げた際に卵を出しているキンメダイから採卵し、船上にて人工受精を行いました。受精卵は保冷ポットに入れて持ち帰りました。

表1 キンメダイ親魚採捕調査結果（2025年度）

回次	捕獲日	釣獲 (尾)	雄 (尾)	雌 (尾)	生存 (尾)	到着時 生存率 (%)
1	7月9日	6	5	1	5	83
2	7月23日	17	11	6	17	100
3	8月20日	1	1	0	1	100
4	8月27日	5	2	3	5	100
5	9月4日	16	8	8	15	94
6	9月10日	19	10	9	18	95
7	9月25日	14	9	5	11	79
8	10月18日	26	14	12	24	92
計		104	60	44	96	92

ふ化仔魚の飼育試験は、親魚採捕調査で持ち帰ったキンメダイから分場で採卵した受精卵と、漁業者の漁に同行して得た受精卵を使用しました。10月18日に釣り上げた26尾はすべて成熟しておらず試験を行うことはできませんでした。1～7回次の調査では成熟している個体を釣ることができ、雌の腹部を押して卵を搾出し、雄から採取した精液か冷蔵保存精液¹⁾で媒

精し受精卵を得ました。9月25日は卵割が確認できず仔魚を得ることはできませんでしたが、他の回次では仔魚を得ることができました。

仔魚の飼育は容量100ℓの円筒形水槽、サンライト水槽（図1）に収容し飼育を行いました。ふ化後の水温は23℃に調節し、ふ化後3日目から餌（栄養強化したワムシ）を与えました。

飼育環境である光（照度の違い）の強さ（強い:2000lux、中間:200lux、弱い:20lux）で摂餌に違いが出るのか試験を行ったところ、2000、200luxで摂餌（図2）していることが確認できました、20luxでは確認できませんでした。

どの回次も長期的な飼育を行うことができず、最長でふ化後11日までの生存でしたが、光の強さが摂餌に大きく関わっていることがわかりました。今後も飼育環境の検討をしていきたいと思えます。



図1 サンライト水槽



図2 ふ化仔魚（6日齢）

（伊藤結花）

参考文献

- 1)長谷川雅俊、稲葉一男、永倉靖大、野田浩之、川合範明（2023）キンメダイ種苗生産のための冷蔵精子保存液の開発、日本水産学会誌，89(3)，236-243

キンメダイ漁場の海底地形調査 ～調査船駿河丸による伊豆東岸沖漁場調査～

伊豆分場では、沿岸・沖合漁業指導調査船駿河丸を活用した海底地形調査を令和6年度から実施しています（伊豆分場だより 379号、378号）。今年度も同様にキンメダイ漁場を対象とした調査を実施しましたのでこの場を借りてご報告します。

今年度は、調査海域を稲取、下田、南伊豆の立て縄漁業者が利用する4漁場に絞り込み、10月28日から29日にかけて「70」と「トンガリ」の2漁場で、11月26日から27日にかけて「高場」と「間の場」の2漁場でマルチビームソナー（FURUNO製）を利用した海底地形の測量を行いました。

それぞれの漁場に300m間隔で東西、南北、斜め（複数方向）に設定したライン上をマルチビームソナーで測量したものが以下の図になります。

調査で得られた画像（鯨観図）

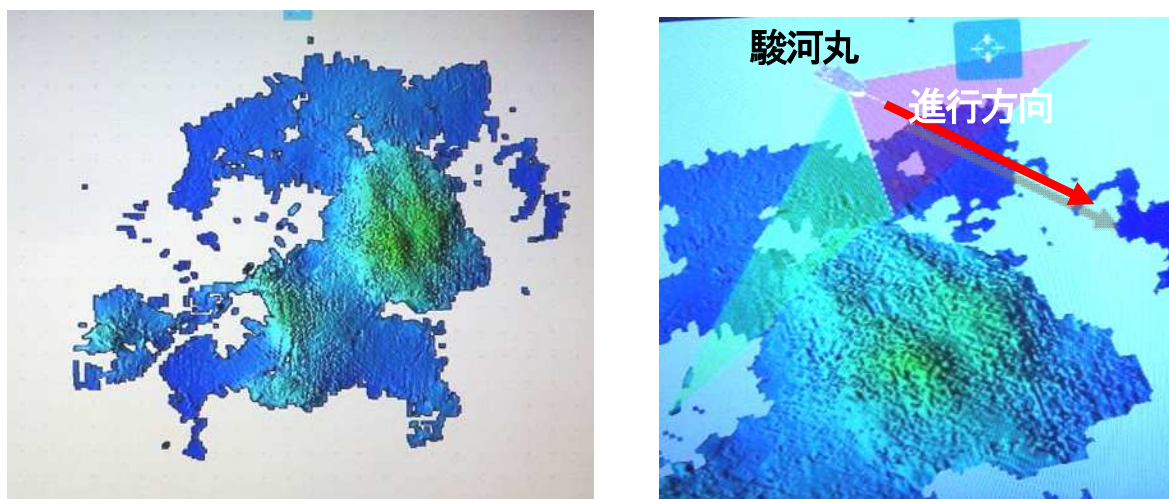


図1 70漁場（左：漁場とその周辺、右：測量中のイメージ図）

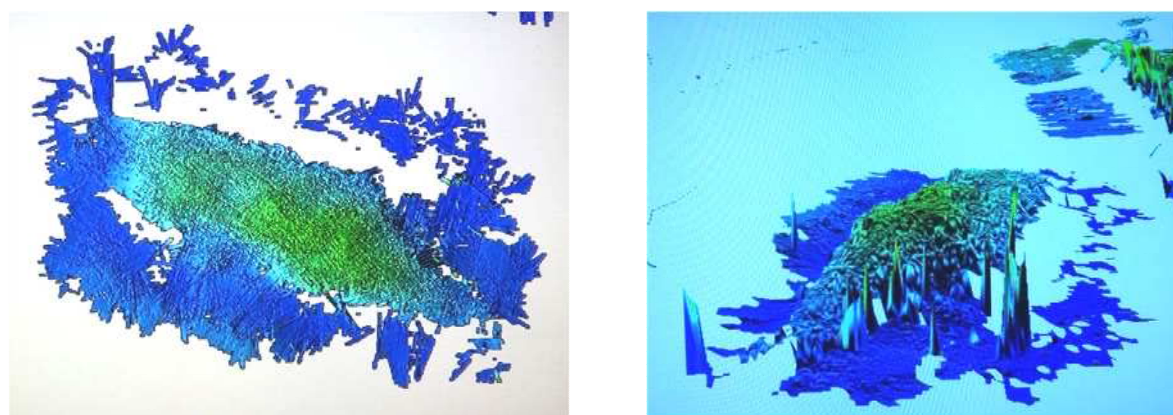


図2 トンガリ漁場（左：南東から、右：北東から）

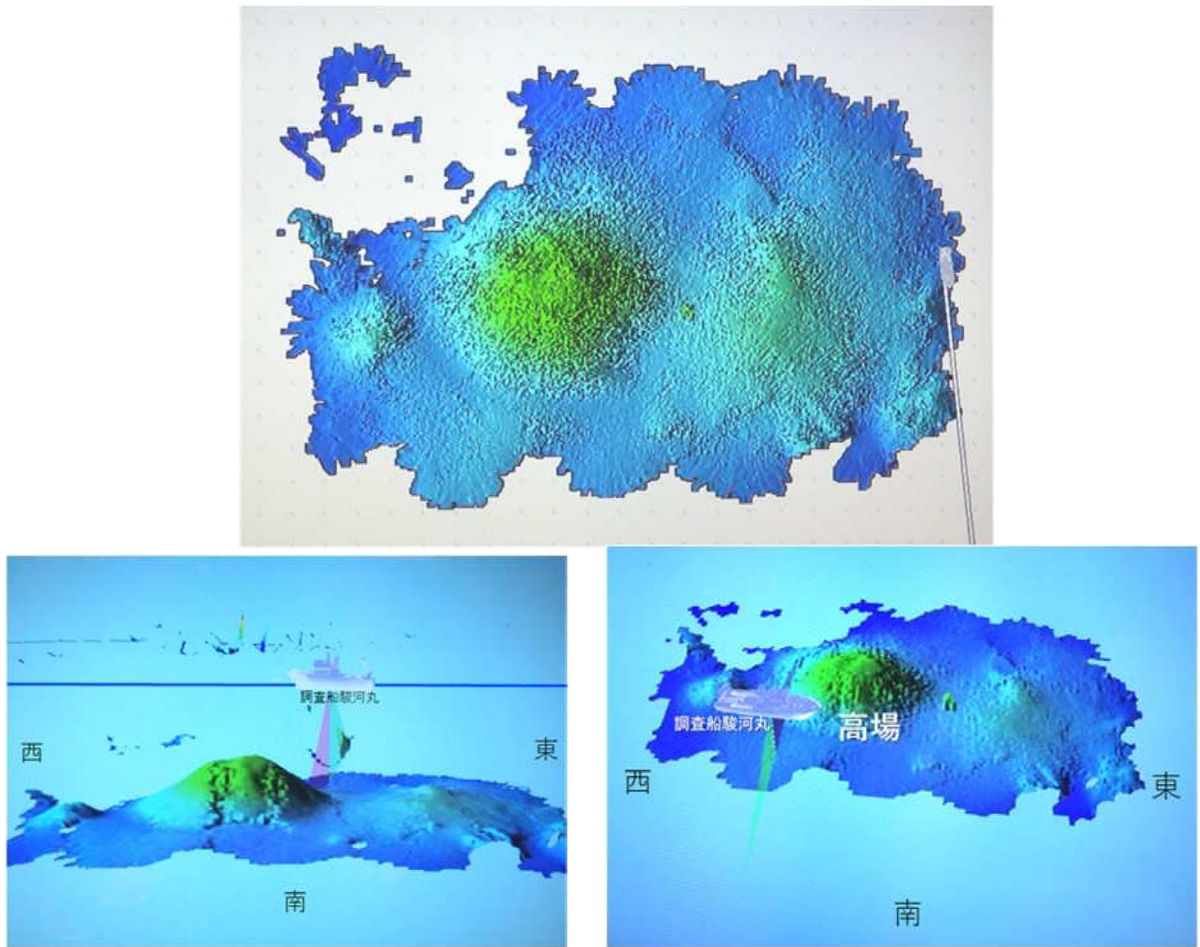


図3 高場漁場（上：漁場とその周辺、下：漁場測量イメージ）

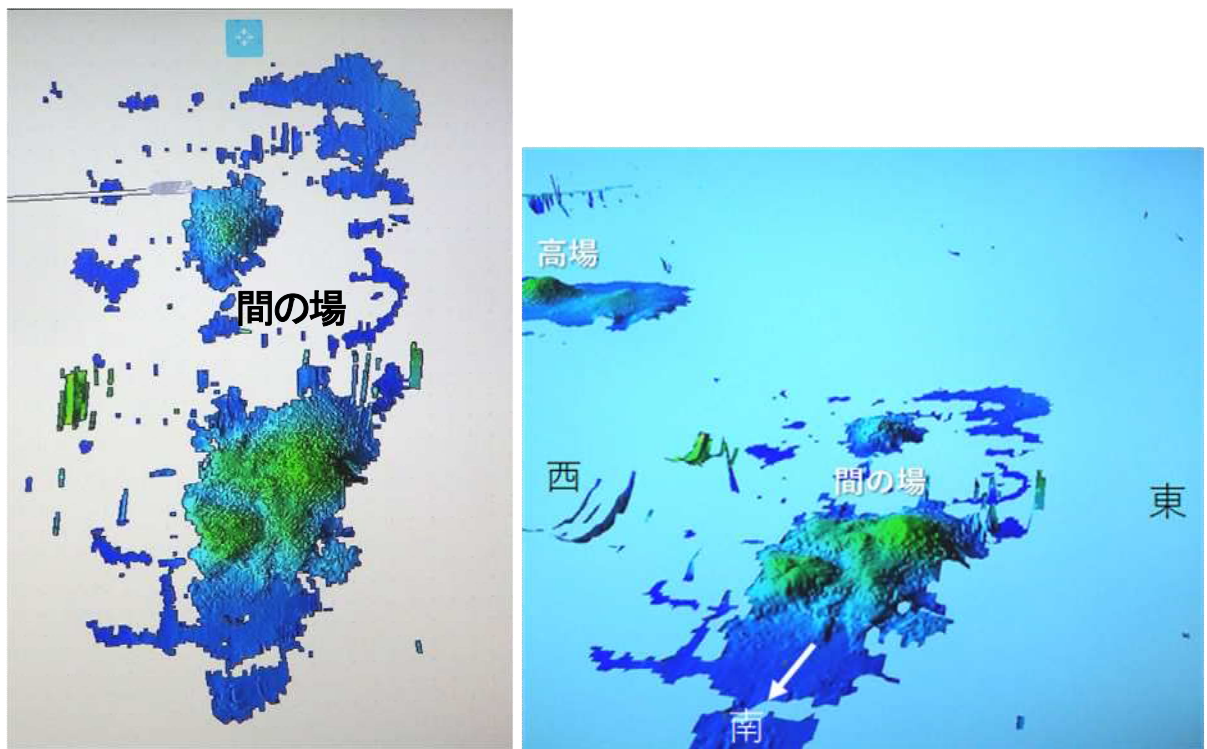


図4 間の場（左：漁場とその周辺、右：高場と間の場漁場の位置）

昨年度調査と同様に、漁場周辺の地形が凸凹含め明らかになり、「トンガリ」は本当に地形がトンガリであり、「間の場」の場所はまさに瀬と瀬の間だったと、漁場の命名法に関心しました。この画像は伊豆漁協を通じて立て縄の漁業者さんにも共有され、現場に出た時など、次はどここの漁場へ調査に行くのかといった期待の声もいただきました。

この調査を実施した時期は、黒潮大蛇行が終息したと言われる令和7年4月から半年が経過した頃でしたが、伊豆東岸のキンメダイ漁業は水揚が思うように伸びず非常に苦しい状況下にありました。キンメダイ漁場の海底地形調査という名目で調査をしているものの、「かつては主要な漁場だったが、現在はキンメダイが見当たらない」という箇所も含まれています。しかし、蛇行後に流路が安定し魚が戻ってきた際、キンメダイの分布がどのように変化するかを知るためにも非常に重要な調査であると考えています。

昨年伊豆分場だよりで報告した際、「伊豆東岸沖漁場では、過去からキンメダイの資源管理ルールを漁業者自ら話し合い、定めてきた経緯があります。漁業が存続する限り、自主ルールの実行や内容の協議は続いて行くと思いますが、今回の調査結果がその一助となることを願います。」と筆者は記載しました。今もその願いは変わっておりません。

黒潮大蛇行の負の影響を受けながらも自主ルールを遵守してきたこの地域に、どうかキンメダイが戻ってきて欲しい、今回の経験を活かした資源管理がこの先も継続してほしいと切に願います。同時に、当场としてもキンメダイの漁況や漁業者が実施する標識放流の成果を、伊豆分場だよりで逐一報告し、資源管理の効果の裏付けにつなげていきたいと思えます。

(松浦玲子)

藻場の回復を目指して ～ 一本釣漁師の願い ～

伊豆漁業協同組合須崎青年部

伊藤壮章

1. 地域の概要

下田市は伊豆半島の東南に位置し、海と山に囲まれた、人口2万人弱の街である(図1)。美しい自然、温暖な気候、温泉はもとより、美しい自然の景観や開港の旧跡などの観光資源にも恵まれ、就業者の約8割を第3次産業で占めている。

私たちの住む須崎半島には、恵比須島や野生の水仙群落で有名な爪木崎、九十浜など風光明媚な景勝地があり、観光の色が濃い地区であるが、須崎は下田市内でも多くの漁業者が所属する、歴史ある地区となっている。



図1 伊豆漁協須崎地区の位置

2. 漁業の概要

下田市の漁業は、沖の伊豆七島近海を中心とした海域の釣り漁業と、地先に広がる岩礁域で行われるイセエビ、アワビ、テングサ等を中心とした磯根漁業の二つに大きく分けられる。図2は下田市内全体の水揚状況(属地)を示しており、下田市魚市場、須崎地区の共同出荷場、漁協の自営事業による水揚が含まれている。このうち、魚類の水揚量全体の84%、同水揚金額全体の88%をキンメダイが占めており、主な水揚場所となる下田市魚市場はキンメダイ水揚量日本一を誇る市場となっている。

市内は6つの浜ごとに地区が分かれており、須崎地区には正組合員53名、準組合員273名が所属している。当地区では、かつて伊豆諸島南部に遠征し上物を追いかけるカジキ突棒漁業が盛んであったが、現在は対象魚種をキンメダイやマグロ類に変え、立て縄、はえ縄、曳き縄といった漁業と、イセエビや貝類、テングサ等を対象とした磯根漁業が行われている。

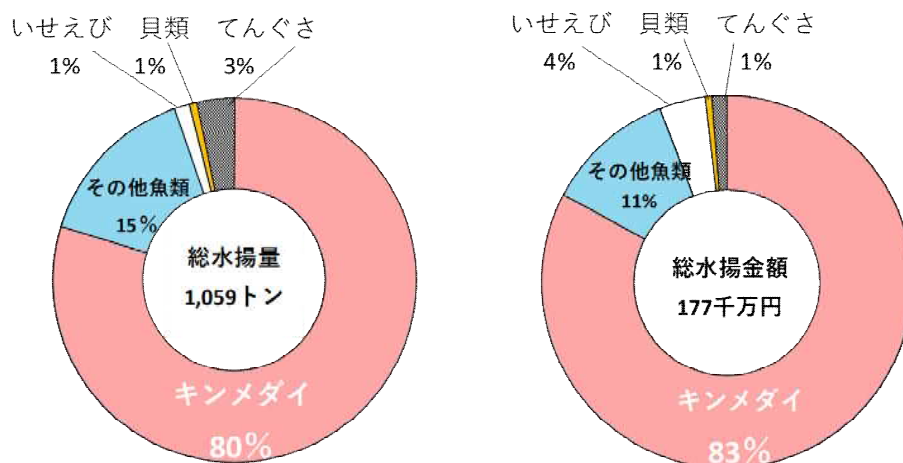


図2 伊豆漁業協同組合下田管内（属地）の水揚げ状況（令和6年）

3. 研究グループの組織と運営

伊豆漁業協同組合須崎青年部は昭和30年に結成された。現在は17歳から50歳までの26名で活動しており、これまでに栽培漁業の放流や効果調査、ワカメ養殖試験（図3）や小学生対象の体験乗船のほか、キンメダイの標識放流やさめ類による漁業被害の実態調査等に取り組んで来た。

私たちの組織の特長は、地区の若手漁業者で構成されている点にある。現在の国内水産業の課題の一つに高齢化や新規就業者数の減少があるが、須崎では80代、70代のベテラン漁師とともに10代、20代の漁師が漁業に従事している。部員は地元出身の若手と他県から移住してきた若手で構成され、同じように船を持ち、漁業を営んでいる。一本釣り漁業に従事している者がほとんどで、日々沖に出てキンメダイやカツオ、マグロ類を漁獲している。



沖出し準備

⇒

沖だし

⇒ 市場における試験販売

図3 ワカメ養殖試験の様子

4. 研究・実践活動の取組課題選定の動機

須崎地区は磯根漁業も盛んな地域である。陸寄りの岩礁域ではイセエビ刺網や潜りの採貝、テングサ漁、岩場でのノリ摘みといった採介藻漁業が行われ、沖に行かない家族や親族はこちらに従事している。昼間は海女や海士が磯でヒジキ、テングサを採って干し、夕方にはイセエビ刺網を仕掛けに漁船が一斉に港から出て行く風景は、私たちにとって当たり前でなじみのあるものであった。しかし、平成29年8月に黒潮大蛇行（以下、蛇行）が始まると、少しずつ私たちの海は変わっていった（図4）。

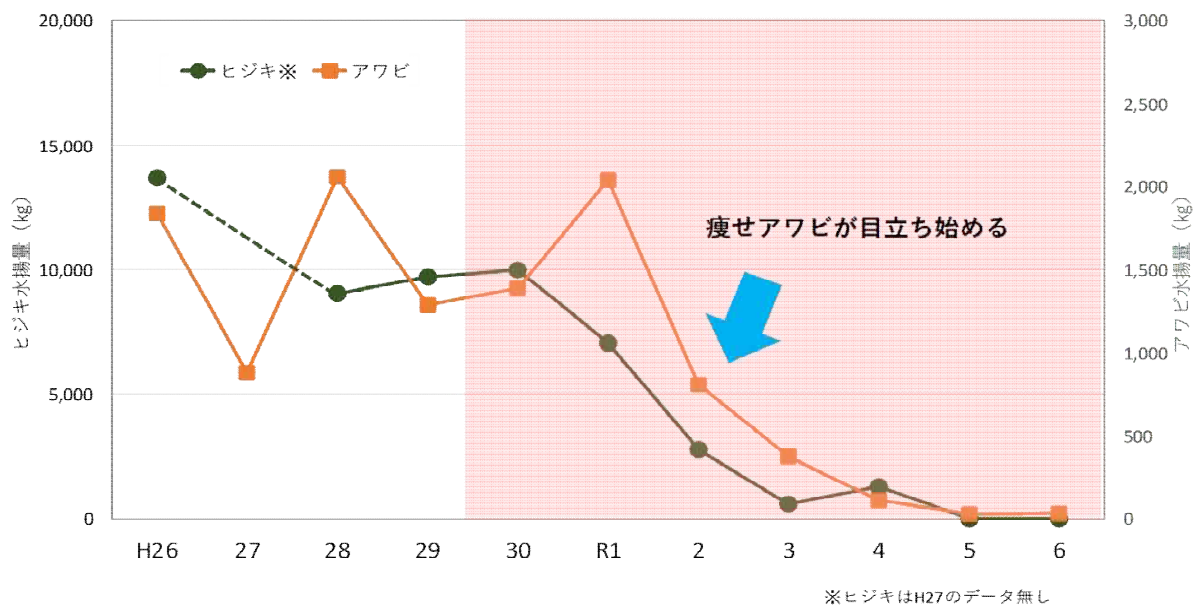


図4 下田市須崎地区におけるヒジキとアワビの漁獲量の推移

(赤でカバーした範囲は黒潮大蛇行期を示す)

かつて、須崎の地先には黒々としたカジメ藻場が広がり、岩場ではヒジキやのりを簡単に採取することができたが、蛇行が始まって以降、沿岸の水温が上昇し徐々にカジメ藻場や岩礁帯の海藻が無くなっていった。蛇行の影響を最も受けたのはアワビで、まず、水深の深いところから姿が見えなくなり、3年後には、浅いところで生き残っていたアワビに痩せが目立つようになった。

私たちは一本釣りの漁師として沖の海と日々関わっているが、磯焼けによる不漁が始まったことで、家族や親戚、地域に「この先どうなるのか」といった不安が広がっているのを感じた。蛇行は今までも何度か発生したことがあり、経験上、磯焼けが発生しても蛇行が解消すれば藻場は再び回復すると知っていたが、今回は数年が経過しても蛇行終息の兆しは感じられなかった。私たちは須崎青年部として、自分たちの住む地域の漁業を少しでも以前のような状況に戻すことはできないだろうかと考え、カジメ藻場の回復に取り組むこととした。

5. 研究・実践活動の状況及び成果

蛇行が始まって以降、カジメ藻場は少しずつ減少し、海藻を食べる魚類（主にブダイ）の姿を度々見かけるようになっていった。これに伴い私たちの取組内容も変化しているため、時系列で報告する。

（1）海藻移植方法の検証

青年部活動でも実施可能な安価かつ簡便な方法で、効果のある移植手法を見つけ出すことを目的として、以下の検証を行った。

ア 打ち上げられたカジメを活用したスポアバックの設置（令和3年）

蛇行開始後、数年間はカジメ藻場はまだ残存しており、私たちもワカメの養殖試験を継続することができていた。実際は、沿岸水温が上昇しており、少しずつ伊豆半島周辺から藻場が消失し、海藻を食べるブダイが越冬しやすい環境になっていたものの、台風の後には浜にカジメが打ち上がるだけの藻場が維持されていた。

私たちは、令和3年に2回、秋の台風で海岸に打ち上げられたカジメを集め、スポアバックにしてカジメ藻場のある須崎の港外と港内へ移植した。スポアバックは手間をかけずに簡単に実施できる種まきの方法で、全国様々な場所で行われている。この時期のカジメは種（遊走子）を出す子のう斑（種の袋）を持っており、乾燥させた後に海水に戻すと一斉に種を放出するため、スポアバックの投入により、カジメから大量の種が出たと推測されたが、当時は伊豆半島全体のカジメ藻場減衰期と重なったこともあり、翌年に新たな芽立ちを確認することはできなかった。

イ カジメ幼体のブロック移植（令和3年から5年）

スポアバックは海中に種（遊走子）を大量に散布できるが効果がわかりにくく、また芽立ちから大型のカジメになるまでに数年が必要なことから、カジメが育つ時間を短縮しようと、カジメの幼体そのものをブロックに付け移植する方法にも取組んだ。

幼体の移植は令和3年に開始した。天然海域にまだカジメが残っていた時代で、カジメとブロックを同じ水槽に入れておいたところ、ブロック表面にカジメの幼体が生育したため、これを海に投入し生育させることにした（第5図）。初めて実施した平成3年6月は、ブロックにカジメを付けたものをダイバーが海に設置した。今であれば「ブダイの食害を防がなくてはならない！」と思うところだが、当時はブダイの食害も目立つほどではなく、部の活動として取組

んでいたワカメ養殖試験にも大きな影響はなかった。しかし、次第に須崎港内でもブダイを頻繁に見かけるようになったことから、令和4年6月実施のカジメ幼体の移植では、食害防除策を試すべく、カジメの生長点にテグスを絡ませたものや、葉状部を網で覆う処置をしたものを移植港の内外に移植した(図6)。しかし、テグスや網で覆っていない部分からブダイに喰われてしまったのか、カジメ幼体は残らなかった。

当時は須崎だけでなく伊豆半島沿岸全域でかろうじて残っていたカジメ藻場がブダイの食害に遭い、カジメが消失した時期であった。この頃から私たちは「食害から海藻を守る策を打たなければ移植した海藻は必ず食べられてしまう」ことを痛感し、食害防除策の必要性を強く感じるようになった。



図5 ダイバー(部員)によるカジメ幼体の移植



図6 カジメの食害防除策

ウ カジメ種苗のプレート移植(令和6年)

今までの移植の経験や海域の状況を踏まえ、私たちは移植時にはブダイの食害対策を強化するため、カジメ全体を丈夫な網で囲い移植することとした。

令和6年は、私たちと同じようにカジメ藻場の復活を目指す静岡県水産・海洋技術研究所伊豆分場（以下、伊豆分場）が、伊豆半島内の漁業者が行う移植活動用にカジメ種苗を配布していたため、これを利用した。

5月下旬に5cm角のプレートにカジメを接着し、2週間ほど伊豆分場の掛け流し水槽で保管したものをコンクリ板に貼付け、6月半ばに港内4か所の海底に設置した。部員がコンクリ板と食害防除網を製作し、省力化を目指してダイバーの手を借りずに船から直接海底に降ろせる構造とした（図7）。



カジメ種苗



コンクリ板にカジメ種苗を貼付け



種苗に網を被せる



ロープを使って海底に設置

図7 カジメ種苗プレートを使った移植

私たちが設置した食害防除網は効果があった。藻食性魚類の食害にも遭わず、半月後、そして3か月後にも須崎港内で成長しているのが確認された（図8）。当時、他の地域の漁業者も同じようにカジメ種苗を自分たちが管理する海に移植していたが、食害防除網をつけずに移植した地区のカジメは一瞬で被害にあ

ってしまったと聞いた。私たちが食害防除に成功した後から、漁業者グループが行うカジメ種苗の移植では魚避けの網がかけられるようになった。

(2) 移植適地の選定

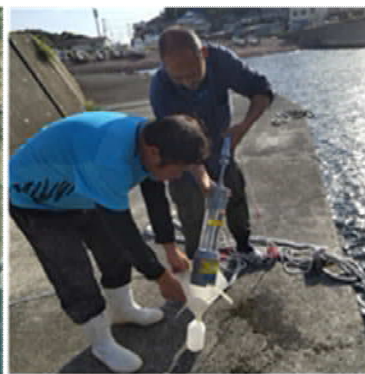
須崎の港内は河川が流れ込んでいる上、港の形が複雑で場所によって塩分や栄養分が大きく異なる可能性がある。令和6年に移植した場所も、ここなら生長するのではないかと想像しながら行っていたが、海環境が海藻にとって好ましくない時期に、場所を選ばず闇雲に移植を行うよりも、カジメが生育しやすい場所に移植した方が良いだろうと考え、令和7年は移植候補地とする複数の点を決め、定期的に採水し、硝酸態窒素（栄養分）と塩分濃度の測定を行うこととした（図9）。



図8 港内移植後のカジメ（3か月後）



採水地点（3箇所）



採水の様子



分析の様子

図9 須崎港内における採水と分析

測定を始めた4月には、硝酸態窒素の測定値が $1 \mu\text{M/L}$ 未満と低く、私たちの分析結果が誤りではないかと思っただが、伊豆分場の情報では蛇行発生以降、海藻が生長するための窒素やリンといった栄養分の濃度は段階的に減少傾向にあり、市内の別の地区の港内も近年は同じような値であると聞いた。その傾向は須崎地区のヒジキの収穫量が減少していった過程とよく似ており、須崎の海も同じような栄養状態であるならば、少しでも移植に適した場所を探そうと測定を継続した。6月以降になると、図10に示したように須崎港内の硝酸態窒素

の測定値が、変動しながら少しずつ高くなっていることが分かった。当初は雨の影響ではないかと考えていたが、8月末に気象庁が「黒潮大蛇行は令和7年4月に終息していた」と発表したことから、測定値の変動は蛇行解消が要因となっている可能性があるかもしれないと思うようになった。この結果と推測が正しければ、今後、沿岸域の硝酸態窒素濃度は変動しながら少しずつ高くなっていくと期待できる。港内の採水と分析を継続するうちに、移植先の候補地が絞られてきた。今後、カジメ種苗の移植を行い、経過を見守りたい。

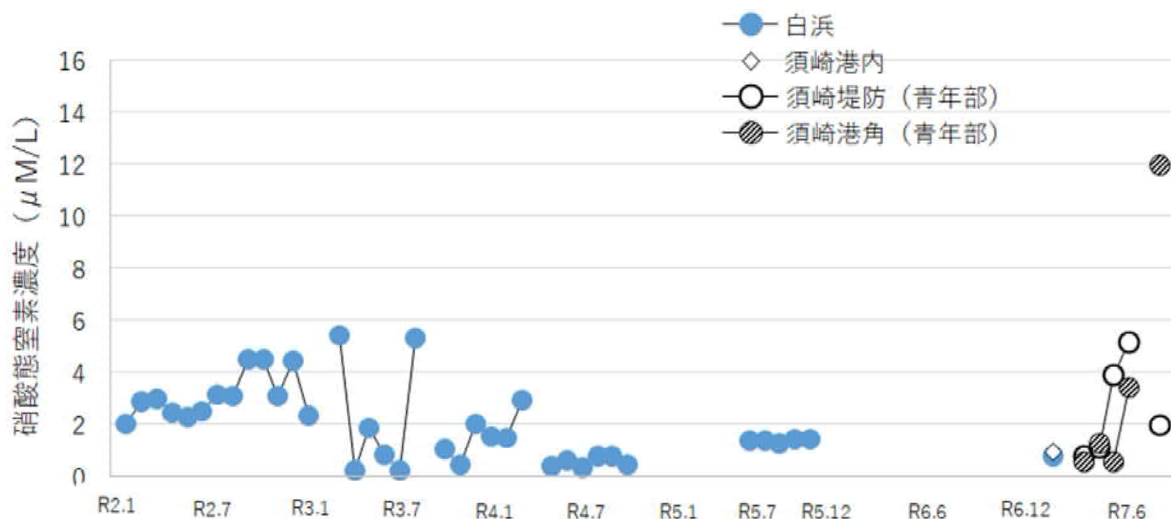


図10 下田市の漁港内における硝酸態窒素濃度の経時変化

() 書きのないものは伊豆分場調べ

6. 波及効果

私たちは令和3年からカジメ移植に取り組んで来た。当初は藻場を回復させたい気持ちが先行し、海にカジメを戻すことだけを考えていたが、取組2年目からは海藻をただ植えるのではなく、食害防除とダイバーの作業が不要な設置方法を考えるようになった。また、海藻の生育環境にも目を向け、カジメが育つ適正な場所を見つけられるよう栄養分や塩分を見ながら移植先を選定するようになった。

そして今、蛇行が終息した。移植をするなら今がチャンスであると、同じように藻場の回復を目指している他地域の漁業者に伝えたい。このことを私たちは自らの青年部活動を通じて知ることができた。

7. 今後の課題や計画、問題点

私たちはカジメ藻場の回復という最終目標までの通過点にいると考えている。

移殖方法もまだ試験段階である。現在は海洋の環境変化があまりにも大きく、海藻移殖に取り組む多くの漁業者や官公庁、民間企業などが同じような課題を抱えている。私たち須崎青年部の最大の強みは若手漁業者が大勢いることであり、新しいアイデアや機動力を、藻場改善に活用していくことができる。これまで、カジメを軸に活動を進めてきたが、地区内にはヒジキの復活を望む声もあり、青壮年部の活動に期待が寄せられていると感じる。長期にわたる黒潮大蛇行は終息した。私たちの海が元に戻るよう、これからも活動を継続し須崎の海を少しでも以前の状態に近づけたい。

本稿は11月14日に水産・海洋技術研究所（焼津市）で開催された「第31回静岡県青年・女性漁業者交流大会」で発表された内容です。須崎青年部は部員のほとんどが釣漁業者でありながら、地元磯根漁業復活のために取り組んだ磯焼け対策活動が評価され、県漁連会長賞を受賞しました。



写真 活動の成果発表の様子

(松浦玲子)

漁 海 況

白浜の定置水温

10～12月の白浜の水温は、平年値と比べて10月は「やや低め」～「やや高め」、11月は「やや低め」～「平年並み」、12月は「やや低め」～「やや高め」で推移しました(表1)。黒潮は、10月から11月前半までC型で推移していましたが、11月後半から12月にかけてC型、N型、C型の順に推移しました。

表1 白浜定置水温の変化(令和7年10～12月)

月	旬	平均(°C)	平年差	前年差	最高	最低
10月	上旬	23.5	0.0	-1.5	24.4	22.8
	中旬	23.5	0.7	-1.0	24.4	22.2
	下旬	21.2	-0.6	-2.5	22.7	20.1
	平均	22.5	-0.1	-1.8	24.4	20.1
11月	上旬	19.8	-1.3	-3.1	20.5	18.7
	中旬	18.8	-1.3	-3.4	19.6	17.9
	下旬	19.0	-0.2	-1.5	19.6	18.1
	平均	19.2	-1.0	-2.7	20.5	17.9
12月	上旬	19.1	0.8	-0.1	20.8	17.7
	中旬	17.0	-0.4	-1.3	17.8	16.1
	下旬	17.1	0.7	0.6	18.0	15.8
	平均	17.8	0.4	-0.3	20.8	15.8

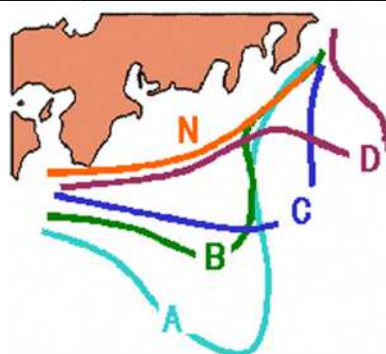


図1 黒潮流型

※水温の平年偏差の目安

かなり低め: $\sim -2.5^{\circ}\text{C}$ 、低め: $-2.4^{\circ}\text{C} \sim -1.5^{\circ}\text{C}$ 、やや低め: $-1.4 \sim -0.5^{\circ}\text{C}$

平年並み: $\pm 0.4^{\circ}\text{C}$ 、やや高め: $0.5 \sim 1.4^{\circ}\text{C}$ 、高め: $1.5 \sim 2.4^{\circ}\text{C}$ 、かなり高め: $2.5^{\circ}\text{C} \sim$

(松浦玲子)

令和7年10～12月の伊豆半島東岸定置網漁況

(1) 月別漁獲量

伊豆半島東岸大型定置7か統（伊豆山、古網、川奈、富戸、赤沢、北川、谷津）における令和7年10～12月の月別漁獲量は表1のとおりでした。

表1 伊豆東岸定置網の月別漁獲量

月	漁獲量(t)	前年比	平年比
10月	317	1.10	0.99
11月	158	1.19	0.60
12月	134	0.89	0.48
合計	609	1.06	0.69

(2) 魚種別漁獲量

多獲された魚種の月別漁獲量と主な漁場は表2のとおりで、さば類、ヤマトカマス、メアジが多く漁獲されました。

さば類はゴマサバ主体で10月の漁獲量が多く、前年を上回りました。ヤマトカマスは10月に漁獲量が多く、平年を上回りました。メアジは12月に漁獲量が多く、前年、平年を上回りました。

表2 各月の上位5魚種の漁獲量と主な漁場

月	順位	魚種名	漁獲量(t)	前年比	平年比	主な漁場
10月	1	さば類	91.6	2.66	1.08	伊豆山、富戸、古網、赤沢
	2	ヤマトカマス	77.6	0.71	2.67	北川、伊豆山、谷津
	3	メアジ	24.6	1.98	1.13	北川、谷津、伊豆山
	4	マルソウダ	17.0	0.49	0.44	伊豆山、北川、赤沢
	5	ウルメイワシ	15.7	2.60	1.44	古網、伊豆山
11月	1	マルソウダ	25.7	1.90	0.78	伊豆山、古網、赤沢、北川
	2	ヒラソウダ	15.4	1.04	2.72	北川、伊豆山
	3	さば類	14.8	3.83	0.21	古網、伊豆山、川奈
	4	メアジ	12.0	0.66	2.78	川奈
	5	シイラ	11.8	3.49	5.11	古網、伊豆山
12月	1	メアジ	31.2	2.37	5.26	川奈
	2	さば類	29.6	0.83	0.40	北川、伊豆山、川奈
	3	メアジ	15.8	3.55	1.28	伊豆山、古網、北川
	4	スルメイカ	10.6	0.98	0.35	北川
	5	イサキ	8.4	1.93	2.97	伊豆山

(鈴木勇己)

分場日誌 (令和7年10月-12月)

10月 1-2日	ブリ類資源研究会 (横浜)	11月27日	ブリ資源評価会議 (Web)
10月3日	イカ類資源評価部会 (Web)	11月28日	スルメイカ資源評価会議 (Web)
10月3日	賀茂船主キンメ部会総会 (下田)	11月30日	NPO あおぞらビレッジ水産教室 (河津)
10月20日	東海3県漁業士交流会 (伊豆長岡)	12月1日	漁業士認定委員会 (静岡市)
10月22日	県定置漁業協会役員会 (伊東)	12月3日	一都三県キンメダイ資源管理漁業者 実践協議会事務局会議 (東京)
10月23日	カサゴ放流 (田子)	12月5日	煙火講習会・小型魚放流効果報告 会 (伊東)
10月28日	技術連絡協議会 (富士養鱒場)	12月8日	賀茂地区漁青連役員会 (下田)
10日 30-31日	下田中学職場体験 (場内)	12月17日	コンプライアンス研修 (Web)
11月12日	水産研究発表会 (水技研本所)	12月22日	県漁業士会役員会 (静岡)
11月14日	青年・女性漁業者交流大会 (水技 研本所)	12月 22-23日	第2回漁海況長期予報会議 (横浜)
11月25日	海底湧水講演会 (仁科)	12月 25-26日	相模湾漁海況研究協議会 (場内)

令和8年4月17日発行

発行 静岡県水産・海洋技術研究所伊豆分場
下田市白浜 251-1 (〒415-0012)
TEL <0558>22-0835 (代)
FAX <0558>22-9330
<https://fish-exp.pref.shizuoka.jp/izu>
E-mail:suigi-izu@pref.shizuoka.lg.jp
編集 伊 豆 分 場